 ©2012 筑波大学生物学類

特集：卒業生便り

# ミツバチと暮らしています

関　高史（筑波大学 生物学類 1997 年３月卒業、農学研究科前期課程 1999 年３月修了）

私は今、北海道の網走市で、小さな養蜂場を開いています。まだまだ先は分かりませんが、一般的な就職とは違った例として参考になるかと思い、これまでの経緯をご紹介します。

## １．「生物バカ」北上する

大学時代は、応用酵素学研究室に所属し、修士で卒業した私でしたが、一般企業への就職活動は厳しい状況でした。そもそも私は、実験室にいるとき以外は、野鳥を中心とした自然観察ばかりしている、いわゆる「生物バカ」なタイプなので、就職活動にむいていないことは自他共に認めるところでした。そこで、微生物学の分野から急遽、方向転換して、新潟のある自然公園に臨時職員になりました。動植物に関する広い知識と経験を蓄えていた「生物バカ」だからこそ可能だった方向転換といえます。

新潟には一年いただけでしたが、職業として自然にかかわる姿勢を考える、よい機会となりました。そして翌年から、北海道の知床国立公園で、自然ガイドとしての職に就くことができました。知床が世界自然遺産になる４年前のことです。

自然ガイドとしての知床での仕事は、自然と人が好きな私にとっては、最高に楽しい仕事でした。しかしながら、数年続けるうちに、問題点が見えてきました。収入の限界でした。北海道の観光の季節は短い夏と冬の流氷シーズンに集中するため、その期間で、ほぼ一年分の収入を確保することが必要です。しかしながら、一日にご案内できる人数には限界があり、体力にも限界があるため、おのずと、収入の限界が見えてしまいます。この問題を解決するには、国立公園などの全体的なシステムも含め、何らかのイノベーションが必要ですが、これは簡単なことではありません。そこで、知床での問題は、新たな若い才能に期待するとして、私は、別の仕事ができないか考え始めました。

## ２．養蜂の道へ

養蜂業は、日本ではあまりメジャーな職業とはいえず、なぜ、養蜂業に？との質問はよく受けます。多くの偶然、出会いの結果としか言えませんが、私自身は、自然ガイド時代と、あまりスタンスは変わっていないつもりでいます。

自然ガイドの使命は、お客様に自然を楽しんでいただくことを通して、自然との付き合い方を考えていただく、さらには自然保護へとつなげていくことにあります。体験と言葉を通じてお客様と自然をつなげるのが自然ガイドとすれば、ミツバチとはちみつを通して、お客様と自然をつなげるのが養蜂業といえます。

ミツバチは、広い範囲を飛び回り、はちみつの十分に採れる場所は限られていることもあり、養蜂業の世界には、暗黙の「なわばり」が厳しくあります。そのため、養蜂家はほぼすべて、世襲といってもいいくらいです。そんな世界に入るのは容易ではありません。今の時代ながら、最初はほぼ、「丁稚奉公」から始まり、仕事を「教わる」のではなく「身につける」世界です。それでも、毎日のようにミツバチに刺され、手や顔を腫らしていたのも、一年ほどで、ミツバチの毒に免疫になり、刺されても平気になります。それでも、実際にプロとして重要な、仕事の速さ、蜂の様子を見る「勘」などは、蜂を触りはじめて 10 年にも満たない私などは、いまだに未熟で、悪戦苦闘、うまくいかないことだらけです。

知床でのキャリアも、まったく無駄にはなりませんでした。ミツバチを飼うには、植物の知識は欠かせません。養蜂家は、ミツバチの役に立つ植物、すなわち蜜か花粉を供給してくれる植物に敏感に反応します。その上で、景色を見ると常に、その場所でいつ、どれくらいはちみつが採れるか、その場所がどの程度のミツバチを養うことができるかを、考えるものです。私の場合は、これまでの生活から、植物を見る目ができていたおかげで、蜜源となる植物は、楽に覚えられました。また、北海道の養蜂は、ヒグマとのつきあいは避けられませんが、ヒグマが日常的にいた知床の自然ガイドのことを思えば、悩む必要はありませんでした。直接的なキャリアとはいえませんが、知床ガイド時代に培った地域の人脈も、独立開業する上では、本当にありがたい助けとなったことも、重要です。

大学で学んだことが有利になった点もいくつかあります。ミツバチの生態については、養蜂家は大学で学生が学ぶよりも、詳細に理解しています。しかし、ミツバチの病気を起こす微生物となると、ウィルス、バクテリア、菌類など、系統的な生物学を学んだほうが、理解しやすくなります。また、現代の養蜂に関しては、西欧諸国のほうが歴史的にも、技術的にも熱心なので、技術書などはよいものがあります。語学は得意とはいえないまでも、資料を直接取り寄せて勉強することもできるのも、大学での勉強のおかげです。

## ３．最後に

大学を卒業して、いきなり独立、開業する方は、多くはないかもしれません。しかし、誰にでも許される選択肢でもあります。もちろん、経済的、キャリア的に要求されるところは多く、私などは今でも苦しい状況は続いています。しかしながら、よりよいミツバチの飼い方を目指して、勉強して、アイディアを考え、工夫をして、実験をして、失敗をして反省して、楽しく仕事をしているのは、自営業だからこそといえます。

養蜂業や農業などの第一次産業は、現在では花形産業とは言いにくい状況です。しかし、経営の工夫次第で、挑戦の余地はいくらでもあります。何より、自然の恵みを受けて、おいしい食べ物を作りだすよろこびがあります。多くの人が、それぞれの知恵と希望を持って、この分野に挑戦してくれることを望んでいます。

Communicated by Fumiaki Maruo, Received January 16, 2013.